

実践真宗学研究科開設から実動まで

前大学院実践真宗学研究科長

内 藤 知 康

実践真宗学研究科は、本年3月に第1期修了生を送り出し、本年4月から開設4年目に入っている。開設から2年間研究科長を勤めさせていただいたという関係で、本紀要に執筆を依頼された。研究科長としての2年間は、開設前には考えていなかった様々な課題が次から次へと生じてきて、対応に追われる毎日であった。しかし、特に大きな問題を積み残すことなく、川添泰信現研究科長に無事バトンタッチできたのは、多くの関係者のサポートの賜であり、ここに深謝しておきたい。

個人的なことではあるが、10年ほど前に、教学部長を拝命した時、任期1年目の末に体調を崩し入院に到ったことがある。その時家人から、「今後は長の付く職は引き受けないように」と言われたのであるが、そうもいかず、開設にこぎつけるまでの企画の段階から関わってきたこともあり、初代の研究科長を引き受けざるをえなくなった。特に1年目は宗教部長との兼務であり、健康が持たせようかとの危惧もあったが、体調を崩すことなく任期を全うでき、今でもホッとしている。

本研究科開設の頃大学院に求められていたのは、研究者の育成と高度職業人の養成という二つの役割であった。龍谷大学真宗学教室においては、従来研究者と高度職業人との二種類の人材養成を兼ねていた文学研究科真宗学専攻を研究者育成に特化し、高度職業人養成（宗教実践者を職業人と位置づけるのには抵抗はあるが）を実践真宗学研究科が担うこととした。すなわち、宗教実践者としての高い能力を身につけさせることが、本研究科の教育目的である。

さて、宗教実践者としての高度の能力を身につけるのに最も必要なものは宗

教実践に対する熱意である。その意味で、入試においても、合格基準としていわゆるやる気を特に重視している。現在在学中の諸君も、宗教実践者としての高度の能力を身につけることに對し、強い熱意を持つことの重要性を再確認して頂きたいと思う。

開設に向けての準備の段階から、開設からの2年間に至るまで、鮮明に記憶していることの一つは大平光代先生による特別講義の実現である。先生のご経歴からして、是非本研究科の院生に先生のお話を聞かせたいと思い、交渉の結果、引き受けて下さったのは望外の喜びであった。しかし、先生のご都合により、中止のやむなきに至り開設からわずか三年のみの開講に終わってしまったことは、大きな心残りである。先生をとりまく環境に変化があり、再び開講頂く状況になることを待ち受けたいので、今後の研究科長の努力に期待したい。

最後に、本研究科の開設目的等について、平成22年10月発行の『龍谷大学論集』第476号に「実践真宗学研究科設立の意義」と題した論文に詳述したので参照していただきたい。